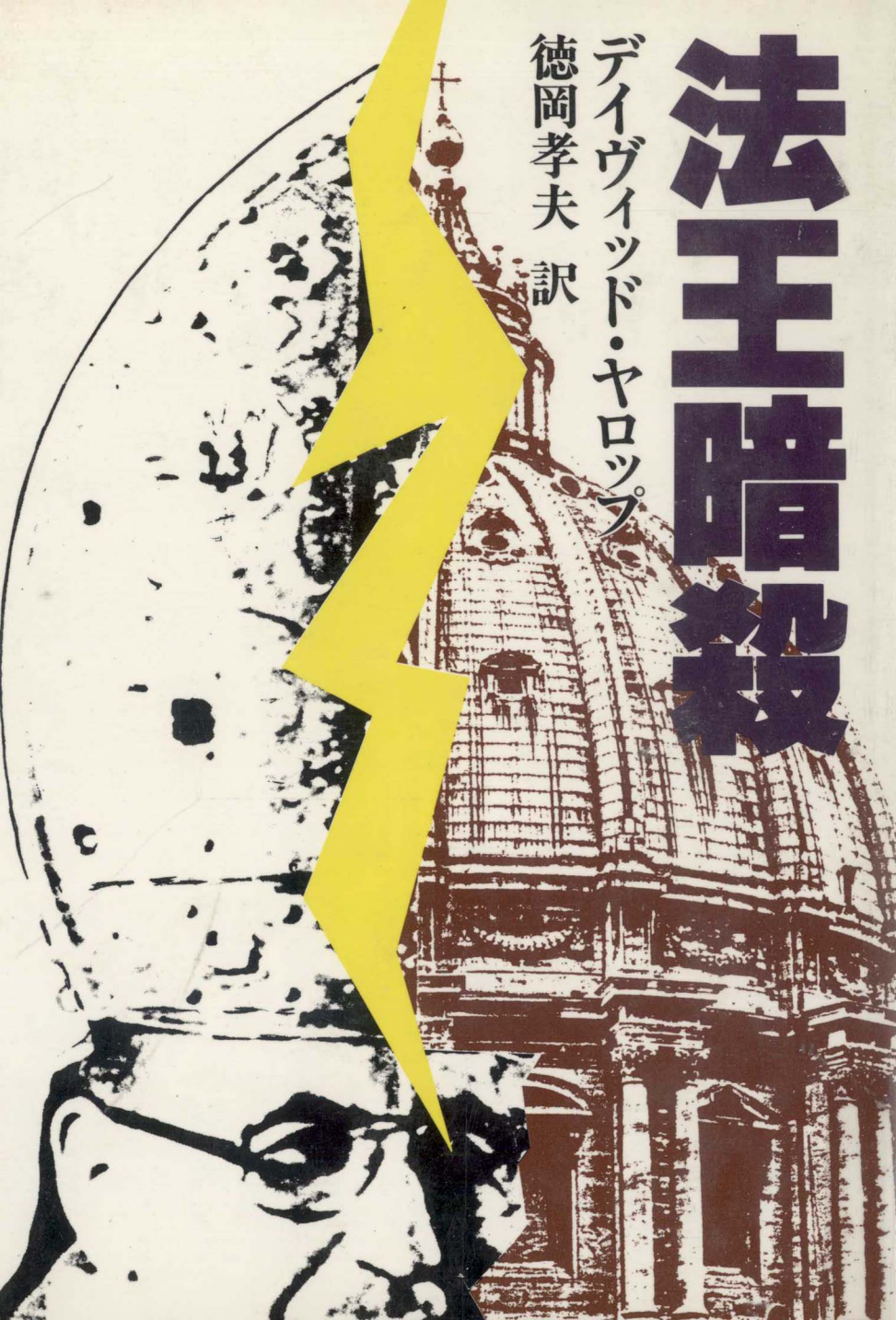


法王暗殺

デイヴィッド・ヤロツプ
徳岡孝夫 訳



法王暗殺

デイヴィッド・ヤロップ

INGOD'S NAME
BY DAVIT A. YALLOP
COPYRIGHT © 1982 BY POETIC PRODUCTIONS LTD.
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH JONATHNA CAPE LTD., LONDON
THROUGH THE ENGLISH AGENCY LTD., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

法王暗殺

一九八五年四月一日 第一刷

定価 一五〇〇円

著者 デイヴィッド・ヤロップ

訳者 徳岡孝夫

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 千

電話 〇三―二六五―二二二一

印刷 大日本印刷

製本 大口製本

万一落丁乱丁があればお取替えします

法王暗殺／目次

プロローグ 7

第1章 ローマへの道 15

第2章 空白の座 75

第3章 教皇選挙会^{コンクラーベ} 91

第4章 バチカン株式会社 111

第5章 三十三日間 175

第6章 深まる疑惑

221

第7章 容疑者の行方

255

エピローグ

309

あとがき

316

解説

318

訳者あとがき

323

装幀・カラー
ジュ
じょ
ら

法王暗殺

疑惑のなかの人々

- ヨハネ・パウロー一世(アルビーノ・ルチアーニ)……一九七八年教皇になる。就位三十三日目に急死
- G・ベネツリ枢機卿……パウロ六世時代の国務次官、フィレンツェ大司教
- ポール・マーチンクス司教……バチカン銀行総裁 シカゴ生まれ フリーメーソン会員
- ジョン・ヴィヨ枢機卿……教皇庁国務長官 フリーメーソン会員
- ロベルト・カルビ……アンブrosiano銀行頭取 ミラノ生まれ フリーメーソンP2会員
- ミケーレ・シンドナ……シチリア生まれの銀行家 パウロ六世時代・教皇庁財務顧問 フリーメーソンP2会員
- リーチョ・ジェツリ……フリーメーソンP2指導者 カルビの友人
- ウンベルト・オルトラニー……弁護士兼実業家 フリーメーソンP2会員

プ
ロ
ロ
ー
グ

ローマ教皇は、世界総人口の五分の一近い人々の精神界を指導する大権力者である。だが、何も知らない人は、教皇ヨハネ・パウロ一世になったアルビーノ・ルチアーニを見て、まさかこの人がそんな権力者と信じなかったことだろう。六十五歳のイタリア人であるアルビーノは背が低く、物静か、見るからに内気で謙虚な人であり、とてもものに傑出した教皇になるだろうとは思えなかった。しかし、内情を知る者は承知していた。アルビーノが、すでに革命に着手していたことを。

一九七八年九月二十八日、彼は教皇に即位後三十三日目を迎えた。就位から短い期間に多くの改革の口火を切り、それはやがてわれわれの上に直接、強い影響となって届くはずだった。大多数の信者は彼の決断を歓迎するだろうが、あわてふためくに違いのない人々も少数ながらいた。「微笑の教皇」とニックネームのついた人だが、翌日にはかなりの人が微笑を失うはずだった。

その夜、教皇はバチカンの居住区三階にある食堂で、二人の秘書とともに夕食をとった。一人は、教皇が枢機卿として二年間ベネチアを司牧した間、彼の部下であったデイエゴ・ロレンツイ神父。もう一人は、教皇選挙会後に秘書になったジョン・マギー神父である。

居住区に仕える修道女たちが、ていねいに給仕をしたが、小食の教皇はコンソメとこし肉、煮豆、

サラダ少々、質素な食事をしただけだった。ときどきグラスの水を飲みながら、その日の出来事や自分が下した決定を食卓の話題にしていた。

彼は、もともと教皇になりたくなかったのである。もちろん、そのための運動などしなかった。ところがいま、期せずして絶大な権力を背負う身になってしまった。

ピンチエンツァ、クロリンダ、ガブリエツラの三修道女は、無言で給仕をした。教皇と二人の秘書はやがて食事を終え、くつろいでテレビのニュースを見始めた。

同じころ、教皇の決定によって打撃を受ける人々は、くつろいでなどいられなかった。教皇居住区の一階下、バチカン銀行のオフィスには灯があかあかとともり、総裁ポール・マーチンクス司教は、夕食をとる状態ではなかった。

シカゴ生まれのマーチンクスは、イリノイ州シセロの裏町で、世間のきびしさを習いながら育った。それから「神の金庫番」へと異例の出世をとげるまでには、多くの危機があった。いま、最大の危機がやって来たのである。

新教皇になって三十三日、バチカン銀行に働く人々は、教皇庁の膨大な財産を管理する総裁の顔色が、目に見えて変わるのに驚いた。身の丈二メートル、体重百キロを超す巨漢で明朗な男が、急に不機嫌になった。だれが見ても、体重が減り、顔が青ざめたのがわかった。バチカンは一種の村で、秘密はすぐに伝わる。新教皇がひそかにバチカン銀行を調査し、とくにマーチンクスの銀行経理に疑惑を抱いているというニュースは、すでに彼自身の耳に届いていた。この三十三日間、マーチンクスは何度、一九七二年のカトーリカ・デル・ベネト銀行との取引を悔いたか知れない。

教皇庁國務長官ジャン・ヴィヨ枢機卿も、夕食をそのけにしてデスクに向かっていた。彼の手には、一時間前に教皇から受け取った人事異動表があった。新任、転任、退職勧告……ヴィヨ

は言葉を尽くして異動を思いとどまるよう教皇に訴え、説得した。だが、教皇は聴かなかつたのである。

画期的な大異動だった。カトリック教会を新しい方向に向ける。それは、ヴィヨを含め解任される者たちにとっては、非常に危険な方向だった。正式発表とともに、世界のマス・メディアには何百万語という分析が、また解説や憶測が、現われることだろう。しかし、解任される者に共通の特徴でありながら、絶対になれも書くはずのない事実が一つだけある。ヴィヨはそれを知っているし、もっと大切なことには、教皇もそれを承知の上である。それが教皇に今回の行動をとらせ、実力者の左遷を断行させた原因である。つまり、解任される連中は、すべてフリーメーソンなのだった。

人事表を受け取る前から、ヴィヨは新教皇に深い危惧の念を抱いてきた。彼は、教皇とワシントンの米國務省の間に取交わされた会話を知る、ごく少数の人間の一人だった。十月二十三日には、米議会の使節団がバチカンに到着し、翌二十四日に教皇に謁見する日程は、すでに決定した。討議のテーマは、産児制限である。

ヴィヨは、アルビーノ・ルチアーニ関係のファイルを慎重に読んだ。それから、前任教皇パウロ六世が回勅『フマネ・ビテ』（公式訳は「人間の生命の伝達に関する道徳原理」）を出す前、ピットーリオ・ベーンネト司教時代のアルビーノが教皇に提出した秘密メモを読んだ。回勅は、全カトリック教徒に向け、あらゆる手段での受胎調節を禁止した有名な文書で、そのことについてヴィヨはすでに新教皇と意見の交換もし、新しい教皇の方針を承知している。つまり、新教皇は受胎調節の全面禁止をやめようというのだった。ある意味ではパウロ六世への裏切りだが、多くの人からは二十世紀への教会の最大の貢献だと評価されるはずである。

ローマを遠く離れたミラノでも、一人の銀行家がヨハネ・パウロ一世のことを考えていた。商

業銀行としてはイタリア最大手のアンブロシアーノ銀行頭取、ロベルト・カルビである。彼は、新教皇が選ばれる前から、身辺すでに多忙だった。四月らしい、イタリア銀行は、ひそかにアンブロシアーノの営業内容を調査している。きつかけになったのは、前年一九七七年の暮から出回ったカルビ糾弾の怪文書である。怪文書は、秘密のはずのスイスの銀行口座名を列挙し、カルビが非合法行為をやっていることを匂わせていた。

カルビは、イタリア銀行の調査がどこまで進んでいるかを知っていた。友人のリーチョ・ジェッリが、日ごとにそれを知らせてくれる。彼はまた、新教皇がバチカン銀行の調査に着手したことも知った。二つは独立の調査だが、一つの銀行を調べればどうしても二つとも調べなければならぬことを、カルビもマーチンクスも見抜いていた。カルビは、自分の金融帝国を守るため、どんなことがあってもイタリア銀行の動きを阻止するつもりである。そうしなければ、十億ドル着服の計画が頓挫してしまう。

一九七八年の夏ロベルト・カルビがどんな立場にあつたかを知れば、故パウロ六世を廉直の教皇が継げばどうなるかは自然にわかる。カルビの帝国は崩壊し、アンブロシアーノ銀行は倒産し、カルビは投獄を避けることができない。登場したヨハネ・パウロ一世は、まさにその廉潔の士だった。

ニューヨークでも、シチリア人銀行家ミケーレ・シンドナが、じつとヨハネ・パウロ一世の動きを見守っていた。

シンドナは、彼の身柄をイタリアに移させようというイタリア政府の圧力と、三年間にわたって闘ってきた。政府は、彼が二千二百万ドルを不正流用した疑いで身柄をミラノに移すよう、アメリカ政府に働きかけている。五月には連邦判事が引渡しに同意したので、シンドナはもう少しで敗北するところだった。

三百万ドルの保釈金を積んで自由になったシンドナは、奥の手を使った。犯人引渡しを許すに十分な証拠があるかどうか、アメリカ政府に立証を要求したのである。理由として、彼はイタリア政府の訴追は実は共産党や左翼政治家の策謀だと言いつてた。彼の弁護士も、ミラノの検事はシンドナ無罪の証拠を隠している、いまシンドナが帰国すれば確実に暗殺されると主張した。次回公判は、十一月に予定されていた。

その夏のニューヨークでは、法廷外でもシンドナを助ける動きが進行した。マフィアの殺し屋でルイージ・ロンシスバッツという男は、シンドナの身柄引渡し裁判で証人になった女性ニコラ・ピアゼのいのちを狙っていた。マフィアはまた、同じ裁判で首席検事になった連邦地方検事補ジョン・ケニーを消すことも請け負った。このほうは、契約料十萬ドルだった。

教皇ヨハネ・パウロ一世がバチカン銀行の営業内容を調べていけば、マフィアがどうあがこうと、シンドナのイタリア送りは間違いない。バチカン銀行を中心とする犯罪網は、マフィアの臭い金の臭気を消し、カルビからさらに先のシンドナにまで届ける特殊な役割を果たしていたのだから。

もう一人、教皇の動きを懸念する男が、シカゴにいた。世界で最も豊かなシカゴ教区の司教、ジョン・コディ枢機卿である。

コディの帝国は二百五十万人の信者、三千人の司祭、四百五十教会を誇っているが、コディはその収入を極秘にしていた。実は、年収二億五千万ドルだったが、コディが隠したのはそれだけではない。その年で彼のシカゴ在任はすでに十八年。司教配転を求める声は、無数の司祭、修道女、平信徒などからローマに届いていた。

前任のパウロ六世も、コディ枢機卿のことは気にしていた。一度は、勇を振るって決断をしかけたが、最後の瞬間に思い止まった。複雑な性格の人だったパウロ六世ならではの躊躇である。

だが彼は、コデイを責める声には正当性があり、早くなんとかしなければならぬことを、少なくとも認めてはいた。

九月下旬の某日、コデイのところにはバチカンから電話があった。バチカン村に、彼が金脈を注いで張っておいた情報網が、また一つのニュースを教えてくれたのである。前任教皇は躊躇したが、新教皇は断行した、コデイは転任に決まった、というニュースだった。

一九七八年九月二十八日。以上に挙げた人々は、いずれも教皇ヨハネ・パウロ一世を恐れるに足る十分な理由があった。同時に、もし教皇が急死すれば、それぞれに得るところ多い人々であった。

まさにそのとおり——教皇は急死した。

即位から三十三日目、一九七八年九月二十八日夜から二十九日朝までの間に、やさしい微笑で知られた教皇は、忽然として絶命した。死亡時刻は不明。死因もまた不明である。

これまでは輪郭を書いただけだが、私は以下に事実のすべてを書くことにより、ヨハネ・パウロ一世ことアルビーノ・ルチアーニの死に真相究明のカギを提供しようと思う。私はまた、前記五人のうち一人が、九月二十八日夜までに、新教皇の脅威を除くべく、すでに行動を開始していたと信じる。その男が中心になって「イタリア式解決法」が実行されたのである。

一九七八年八月二十六日、アルビーノ・ルチアーニが新教皇に選ばれたとき、教皇選挙会コングレガツィオネから出てきた英国人のバシル・ヒューム枢機卿は、こう語った。

「この結果は意外だったが、いったん下った決定を見ると、申し分なく完全に正しい決定であることがわかった。われわれはみんな、彼こそ神のお選びになった人と感じた」

私がこれから読者の前に提供するの、三年間にわたって私が教皇の「死」を追い続けてきた

取材の成果である。取材に当たって、私はいくつかのルールを作った。ルールその一は、まず最初から始めよ、である。主人公はどういう性格、個性の人だったか？

私は、まずアルビーノ・ルチアーニの物語から始める。